
胆試し。

網野雅也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胆試し。

【Zコード】

N5167V

【作者名】

網野雅也

【あらすじ】

修学旅行の余興として胆試し大会が墓場で行われたのだが……

修学旅行の初日、その夜は肝試しをすることになっていた。宿泊施設からそう遠くない場所に墓地がある。そこは比較的広い敷地で、真ん中の一本道を挟むように墓石が並んでいる。墓は周りを木々に取り囲まれていた。入り口は狭く、植物の葉がアーチを描くように覆いかぶさっている。

「じゃ順番にいってくれ

「はーい」

墓の入り口より離れたところは広場があつて、そこで生徒達は待たされていた。

「次は6番と8番だ」

ランダムに呼ばれた番号をもとに、男女一組を形成する。俺はらつき一なことに、相手は以前から思いを寄せていた愛ちゃんとペアを組むことになった。

先生に呼ばれて僕と愛ちゃんは入り口までやつてくる。

「なんか怖いね……」

「余裕余裕」

実は俺も怖い、だが、彼女の手前怖いなどと死んでもいえない。

精一杯虚勢を張つて、

「じゃ行こうか」

「うん」

俺達は林の中にあるアーチをくぐつて墓地に潜入した。

「いきなり、人工的な火の玉が視界の端を行き来している。
きやーー！」

「大丈夫大丈夫」

墓石の向こうから伸びた竹竿。

月光を受けて閃く釣り糸。

粗野な仕掛けを見ると、怖いといつより情けなくなる。

「きやーー！」

それでも愛ちゃんはかなりびびっていて、俺の右腕にしがみついてくる。

役得ところのなーいことをいつのだ。

飛んで来たコニー雅クをひらりと避けながらほくわ笑む。

墓場を半ばほど過ぎた頃、左の墓地群の隙間から白装束の女性が飛び出しついた。

「うおー！」

「あやーーー！」

「ひええ」

幾分冷めた田で見ていたが、お愛想程度のリアクションだけは忘れない。

先生達も大変なんだ。

こんな薄暗い場所で蚊に刺されながら……ん？

「きやーあの幽霊手招きしてるよ」

「あ、ああ」

白装束の女がおいでおいでをしながら、意味ありげに墓と墓の隙間に滑り込んでいく。彼女が入った辺りを透かし見ると、細い通路みたいなものがあつて、左側の墓の後ろへと回りこんでいるようだつた。特別なコースでも用意しているのだろうか。

「行つてみよつ」

「ええ

「楽しまなきやー！」

「う、うん……」

愛ちゃんに努めて明るい声をかけてなだめ透かし了解を得る。

わき道に俺が先頭に立つて切り込み、後ろ手はしっかりと愛ちゃんの手と結ばれている。

握り返してくる柔らかい感触に幸せを感じる。
俺って変態チック?

気がつくと白装束の幽靈は消えていた。

そして、何か妙だつた。

このわき道に入りこんだ瞬間、耳の中の気圧が変わったような感覚を覚えたのだ。よく高い山から車で坂を下っていると、気圧さで耳が聞こえにくくなるあれに似ている。

「あ、あれ？ おかしいよ、今入ってきたところが」

僕は彼女に言われて振り返ると、墓地群の寒々とした佇まいが消えていた。

いや、そればかりではない。

周りを見渡すと、まるでどこかの山中にでも紛れ込んだような風景。

細い道の両側には切り立つた山の斜面があるのだ。

「いー、どー？」

「そ、そあ……」

「さあつてどうなつてんのよ！」

彼女が急に声を張り上げて、僕の胸倉を掴んできた。

パニックになつてゐるらしいって、俺もパニック！

「と、とりあえず、この細い道の先に行つてみるしかないよ

「そ、そんな」

「だつて、後ろも行き止まりだし、前に進むしか

「う、うん」

愛ちゃんが落ち着くのを待つて、

「深呼吸、深呼吸～」

一人で一度大きく息を吸つて、胸の空氣を全部搾り出すまで吐く。

俺は夜氣の肌寒さにジャージのあわせを内に絞り込んだ

なんでこんなに寒いんだ

「変な場所だな……」

「うん、墓地広いたつて、もう大分歩いているのにおかしいよ」
肝試しのロースは墓の入り口から真っ直ぐ歩いて出口をでるだけ
のはずだった。わき道に特別ロースを作ったとしても、わざとつぐ
に墓地を抜けているはずだ。

なにより、人の気配があるでしょ。

先に出口に達した他の連中のざわめきが聞こえてもいい頃なのに、
辺りはうつそりと静まり返っている。薄闇の中には冬枯れしたよう
な裸の木立がまばらに見えるだけだ。

「ここって既に墓地からはみでて、全然違つといひ歩こてるんだじや
……？」

「かもしけない……」

俺と愛ちゃんは蟻のはいでる隙間がないほど密着していたが、快
感をむさぼる余裕はなかつた。

歩くたびに、この場所の異様さを認識せられる。墓地にいたときは、真っ暗闇ではあつたけど、ここでは周りのありとあらゆるもの
のが灰色がかつていた。

セピア色の写真の中には入れたらこんな世界が広がつてゐるに違
いない。

「あ、あれはなんだろ」

「石仏みたいだね」

しばらく寄り添つて歩いていると、道の端っこにひつそりと
お地蔵様が佇んでらつしゃる。誰かがお参りにくるのか、その傍にはお供え物のお菓子が置いてあつた。

グ のスナック系のお菓子だ。

「誰か人いなかな、このままじゃ私達遭難しちゃつよ」
遭難で住めばいいが……

俺はもつと不吉な事態を想像していた。

だが、口には出せない。まだ確証がなかつた。

「あ、みて、小さな小屋みたいなのがある」「え……民家かな」

「行ってみよ、うつよ」

木板の古びた引き戸を手の甲で叩いてみる。

「返事がないね」

「おかしいな」

部戸の隙間から白い煙のようなものが漏れている。中では人の気配や物音がしていた。

「開けますよ～」

「お邪魔します、こんな夜遅く……」

丁寧に断りをいれながら、戸を開けてみる。

「あ、誰だ、お前ら」

「」、「ここへ何しに来たんだ」

中に入ると、土間をあがつたところに数人の人影が見えた。みんな俺達と同じようなジャージを着ている。

「同じ学校の生徒？」

「あんたら誰だ」

「俺達は捕まっているんだ」

質問を投げかけると、一様に彼らは齧えた顔でそう答えた。俺は彼らをよく観察してみる。

ぼろい床に並んで座っているが、みんな手を後ろに回している。

「ちょっとあがりますね」

俺は十足で奥へ踏み込むと彼らの後ろに回りこんで確認する。やはり……

「愛ちゃん、この子ら、太い縄で縛られているよ」

「ど、どういうこと？」

愛ちゃんが目を白黒させて不安な声をあげた。と、その時だった。

縛られている坊主頭の男子が目を剥いて叫んだのは。

「お前ら逃げるー。あいつが帰ってくる前にー。」

「な、なんだよ、いきなり」

「山姥が走る音聞こえねえのかよ」

「山姥、はて、どこかで聞いた様な。俺は外に出て周囲の音に気を払った。

ズズン、ズズン……

どこか遠くでバッファローの群れが走っているような地鳴りが聞こえる。

「早く逃げろ」

「さあ、俺達にかまわずに」

「そんなこと……」

周囲の脅えきつた顔を見ていると、だんだん俺も怖くなってきていた。

愛ちゃんは彼等の手前、気遣う素振りを見せるが体は正直だ。

片っ方の足が戸外に出ている。

「よし！」

煮え切らない俺達を見かねてか、縛られた生徒の一人が立ち上がった。

どうやら、自力で紐を解いたらしい。

五分刈りの黒髪が勇ましく見える、精悍な顔立ちの少年だ。

「付いて来い！」

逡巡している俺達の裾を彼は引っ張り無理やり戸外へ連れ出した。

俺達は無情にもあの家にいた他の名もしれぬ生徒達を置きざりにして、先導してくれる少年の後に付き従つた。

「貴方名前は？」

「隼人」

「俺、秋人」

「愛です」

相手が下の名前を述べるので、それに俺達も倣つて名乗りを済ませる。

「あの子たちはいいの？」

「大丈夫だ」

隼人はべもなく言い切つた。

何が大丈夫なのは分からぬ。

だが、その断言には、反論を許さない迫力みたいなものがあつた。

「ちょ、はや」

彼は木々の妨害をもろともせず、合間を走り抜ける。少し目を離したら、見失いそうな勢いだ。

「きやがつた……」

彼の鬼気迫る声を聞いて、俺達も背後を顧みる。黒い影がすぐ後ろに迫つてきていた。

「あれなんなの？」

「山姥だよ」

「うわああ

俺はもう一度振り返つて見ると、すぐ後ろにその化け物はいた。話している間に距離を詰められていた。

なんて足が早いんだ。

皺くぢやの老婆の顔がにやつと俺に笑いかける。

「気持ち悪い！」

薄墨色の小柄な体に似合わず、手足や腕の筋肉が異常に盛り上がりつている。

婆さんなんて生易しいものじやない、これはまさしく妖怪。

四つんばいでしるその姿は背筋が凍るほど氣味が悪い。

「きやああ」

俺達の動搖の間隙をぬつて甲高い悲鳴が薄暗い山道に響いた。

山姥はいつの間にか愛ちゃんのお尻にしがみついていた。

「おい、離れる！」

俺は呆然としてその様子を見ていたが、隼人は臆せぬ行動に移っていた。愛ちゃんから山姥を引き離しにかかっている。遅れて俺もそれに加わる。だが、山姥は小柄な体に似合わず、恐るべき力を秘めていて二人がかりでも剥がせそうにはない。

「仕方ない！」

そのうち、隼人は何を思つたか愛ちゃんの足を払い、横から体当たりをした。愛ちゃんが横倒しに地面に接触する前にその間に体をわりこませ、衝撃だけは自分が引き受ける。

「さあ、秋人、山姥を！」

「おう」

俺は急激な展開に氣後れしながらも、修羅場にあるせいか不思議と彼の意図を汲んではばやく動いていた。

すかさず、横倒しになつた愛ちゃんの尻にしがみつく山姥に渾身の蹴りを放つた。

「このこのこのー！ 離れる！」

踏んで踏んで踏みまくる！

隼人も立ち上がり蹴りは倍増。

調子に乗つて蹴りまくつていると、山姥がその足を掴んで俺を強引に引き倒した。

「助けてー」

「このやろー」

それでも俺は負けなかつた。

蹴りがダメなら、拳を打ち付けるのみだ。

周りの土や草花が飛び散るほどの大乱闘。

無我夢中で山姥を叩いていたはずだったが……

「おい、どうした？」

「え？」

気がつくと、俺は数人の先生達に囲まれていた。

すぐ横には衣服を乱した愛ちゃんが涙で顔をぐしゃぐしゃにして

手足をばたばたさせている。

一体何が？

「の後俺達は先生にひびく叱られた。

状況は一目瞭然。

弁解の余地はなかつた。

後に彼女とは付き合うことになるのだが、このときのこととは、たぶん狸か狐に化かされたのだらうつてことで落ち着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5167v/>

胆試し。

2011年8月5日03時15分発行